

春が来た

作詞 高野辰之

作曲 岡野貞一

(前奏あり)

一 春が来た 春が来た どこに来た

山に来た 里に来た 野にも来た

二 花がさく 花がさく どこにさく

山にさく 里にさく 野にもさく

三 鳥がなく 鳥がなく どこでなく

山でなく 里でなく 野でもなく

花

作詞 武島羽衣

作曲 瀧廉太郎

(前奏あり)

一 春のうららの隅田川

のぼりくだりの船人が

權のしずくも花と散る

眺めを何に喩うべき

二 見ずやあけぼの露浴びて

われにも言う桜木を

見ずや夕ぐれ手をのべて

われさしまねく青柳を

三 錦織りなす長堤に

暮るればのぼるおぼろ月

げに一刻も千金の

眺めを何に喩うべき

朧月夜

作詞 高野辰之

作曲 岡野貞一

(前奏あり)

一 菜の花島に 入日薄れ

見わたす山の端 霞ふかし

春風そよ吹く 空を見れば

夕月かかりて 匂い淡し

二 里わの火影も 森の色も

田中の小路を たどる人も

蛙の鳴くねも 鐘の音も

さながら霞める 朧月夜

仰げば尊し

文部省唱歌

(前奏あり)

一 仰げば尊し わが師の恩

教への庭にも はや幾年

思えば いと疾し この年月

今こそ別れめ いざさらば

二 互いに 睦し 日頃の恩

別るる後にも やよ忘るな

身を立て 名をあげ やよ励めよ

今こそ別れめ いざさらば

三 朝夕馴にし 学びの窓

螢の灯火 積む白雪

忘るる間ぞなき ゆく年月

今こそ別れめ いざさらば

紅葉

作詞 高野辰之
作曲 岡野貞一

一 秋の夕日に照る山紅葉

濃いも薄いも数ある中に

松を色どる楓や葛は

山のふもとの裾模様

二 溪の流れに散り浮く紅葉

波にゆられて離れて寄って

赤や黄色の色様々に

水の上にも織る錦

赤とんぼ

作詞 三木露風
作曲 山田耕作

(前奏あり)

一 夕焼小焼の 赤とんぼ

負われて見たのは いつの日か

二 山の畑の 桑の実を

小籠に摘んだは まぼろしか

三 十五で姐やは 嫁に行き

お里のたよりも 絶えはてた

四 夕焼小焼の 赤とんぼ

とまっているよ 竿の先

故郷 ふるさと

作詞 高野辰之
作曲 岡野貞一

一 兎追いしかの山 うさぎおやま

こぶなつ 小鮒釣りしかの川 かわ

ゆめ いま 夢は今もめぐりて

わす 忘れがたき故郷 ふるさと

二 如何にいます父母 いか ちちは

つつが 恙なしや友がき とも

あめ かぜ 雨に風につけても

おも い 思い出ずる故郷 ふるさと

三 志をはたして こころをかた

いつの日にか帰らん ひ かえ

やま あお 山は青き故郷 ふるさと

みず きよ 水は清き故郷 ふるさと

荒城の月 こうじょう つき

作詞 土井晩翠
作曲 瀧廉太郎

一 春高樓の花の宴 はるこうろう はな えん

めぐ さかすき 巡る盃 さかすき かげさして

ちよ まつ え 千代の松が枝わけ出でし

むかし ひかり 昔の光 ひかり いまいざこ

二 秋陣営の霜の色 あきじんえい しもいろ

な かり かずみ 鳴きゆく雁の数見せて

う つるぎ て 植うる剣に照りそいし

むかし ひかり 昔の光 ひかり いまいざこ

三 いま荒城の夜半の月 いま こうじょう よわ つき

かわ ひかりた 替らぬ光誰がためぞ

かき のこ かずら 垣に残るはただ葛

まつ うた あらし 松に歌うはただ嵐

四

てんじょうかげ 天上影は替らねど かわ

えいこ うつ よ 栄枯は移る世の姿 すがた

うつつ いま 写さんとてか今もなお

ああ こうじょう よわ つき 嗚呼荒城の夜半の月